

英語の接辞と音声変化

上 利 学

English Affixes and Phonetic Change

Manabu Agari

0. はじめに

英語の語彙を豊かにするうえで、接辞が英語史上重要な役割を果たしてきたことは周知の事実である。英語学習者にとっても、接辞の知識は語彙を増強するうえで有益なツールとなっていると思われる。接辞の意味と機能の知識があれば、語幹をもとに派生語の習得が容易となる。卑近な例を挙げると、古英語起源の否定を表す接頭辞である *un-* は、*kind* と結びつくと「不親切な」の意となる。また、*kindness* の接尾辞 *-ness* は名詞をつくる機能をもつため、*dark* など語幹の意味がわかれば *darkness* がたとえ初出であっても品詞及び意味の理解が可能となる。このように、接辞の知識があれば語彙の増強が可能となるだけでなく、名詞や形容詞などの品詞を判断できるという利点もある。

その一方で、同じ機能をもつ接頭辞が複数の異形をもつ場合がある。例えば、*indifference*, *impossible*, *illogical*, *irregular* のように、*in-*, *im-*, *il-*, *ir-* の接頭辞は、形は異なるが、いずれも反意語をつくる機能を持っている。全く同じ意味をもつ接辞が二つとないように (Brook 102)、微妙な意味の差異をもつ接頭辞が複数あると理解すればよさそうだが、*un-* や *dis-* などの語源が異なる接辞と違って、上記の例には当てはまらないと思われる。英和辞書でも十分な説明は得られない。複数の英和辞書で *im-* を引くと、*in-* と同じだとか、*in-* を見よと指示される。その *in-* を参照しても理解は得られない。英和辞書の簡素な指示だけでは、逆に学習者に混乱をきたすだけである。この問題を解決するには、音声変化の過程を射程に入れながら英語の歴史を遡る必要があるとされる。小論の目的は、英語史と音声学の知識を活用しながら、*in-*, *im-*, *il-*, *ir-* のように、形は異なるが同じ意味機能をもつ接頭辞の仕組みを明らかにし、派生に関する理解を深めながら効果的な学習を可能にする手掛かりを提示することである。

1. 接辞の歴史

接尾辞と音声変化の関係を論じる前に、接辞の歴史を概観する。歴史的概観については、Baugh & Cable による *A History of the English Language* 及び Charles Barber の *The English Language: A Historical Introduction* を主として参考にする。英語はその歴史的発達の中で外国語の影響を強く受けてきており、接辞も外国語からの借用が多い。外国語起源の接辞は音声変化と密接に関連しているため、拙論では語の派生に大きな役割を果たしてきたラテン語とフランス語を主な調査対象とする。

古英語期は外国語の流入が極めて限られているため、語彙を豊富にする手段として複合語に加え派生が中心的な役割を果たした。この方法によって英語の動詞は10倍近く増えた (Baugh & Cable § 50)。以下に接辞の例を若干示す。

接頭辞：for-, mis-, of-, over-, to-, un-, under-, with-

接尾辞：-dom, -hood, -full, -less, -like, -ness, -ship

1066年の Norman Conquest によりフランス人が支配階級を占めるようになって以降、大量に借用されたフランス語が英語の語彙を豊かにする一方、古英語期に語形成上重要な役割を果たしてきた複合や派生は勢いを失った (Baugh & Cable § 138)。例えば、-full, -ish, -less, -ness のように現代まで新語を造り続けている接辞がある一方で、over-, under-, with- などはあまり使われなくなり、-dom (freedom, wisdom), -hood (manhood, likelihood), -ship (friendship) などは造語力を失った。for- は中英語期には新語を造る力を失い、現代英語に生き残った語は少ない (forbear, forbid, forget, forgive など)。代わりにフランス語やラテン語起源の接頭辞が台頭してきた (counter-, dis-, re-, trans-, -al, -age, -ance, -ment など)。

初期近代英語期には、文芸復興の波を受けて大量のラテン語が流入し、フランス語 (起源はラテン語)、ギリシャ語 (ラテン語を通して) の接辞も取り入れられた。外国語起源の接辞が豊富に取り入れられたものの、英語起源の接辞は依然として高い造語力を保ち (un-, -er, -ist, -ly, -y, -ness など)、外国語起源の接辞よりも多くの新語を生み出した (Nevalainen 2006: 70; Barber 1993: 220)。1500年から1700年にかけては、un- は派生語の40%を占め、名詞、形容詞、分詞、動詞、副詞と柔軟に結合した。接尾辞については、-ness と -er の造語力が傑出して高く、派生語の半数近くに達している (Barber 1976: 233-35)。また、同じ初期近代英語期には、ラテン語から新しい接辞が英語に取り入れられ、主にラテン系の語と結びついて派生語を造った (Nevalainen 1999: 378-79)。以下に、*The Oxford English Dictionary* (OED) から補足しながら、19世紀の借用例を含めて示す。

接頭辞：anti-, de-, dis-, hyper-, inter-, mega-, multi-, non-, omni-, pre-, pro-
 接尾辞：-able, -ance, -ancy, -ee, -ie, -ize, -logy, -mania, -phobia, -phone

接辞が造語形成に果たしてきた大きな役割を指摘する Sheard (52) は、vert (回る) と scribere (書く) を語幹とする派生語を列挙することによって派生による造語力を示している。

vert

advert, convert, controvert, divert, extrovert, invert, introvert, pervert, revert, retrovert, subvert

scribere

【名詞】conscript, conscription, description, inscription, prescription, proscription, scribe, script, subscription, superscription

【形容詞】descriptive, prescriptive, prescriptive, proscriptive, scribal

【動詞】describe, circumscribe, escribe, inscribe, prescribe, subscribe, scribble

上述したように、接辞は造語の一手段としてラテン語、フランス語、ギリシャ語などの外国語を利用しながら英語の語彙を豊かにする一翼を担ってきたが、接頭辞の中には異形を持つものも生じたため、そのことが英語学習者の理解を妨げているのではないかという懸念が拭えない。次節では、英語史と音声学の知見を応用しながら接頭辞と音声の関係を紐解いてみたい。

2. 接尾辞と音声変化

話し言葉において、ある語の音が隣接する音の影響で変化することがある。この現象を同化 (assimilation) と言う。Peter Roach (124) によれば、同化は話す速さやスタイルによって異なり、打ち解けた会話ではよく見られるが、ゆっくりと注意深く話す場合には頻度が下がる傾向がある。音声学では現代英語を研究対象とするため、同化は現代英語で生じる現象だと考えられがちだが、長い英語の歴史の中で生じた音声変化においても頻繁に起こっている。Charles Barber (1991: 44) は英語の歴史の中で生じた音声変化を例示し、同化が生じる理由として効率性 (efficiency) を挙げているが、同化を英語の歴史的発達の中で捉えることにより、異形を持つ接頭辞の仕組みを明らかにすることが可能となる。派生語の形成が語彙を豊かにする状況を明確に示すために、接辞と語幹の意味、及び意味の派生にも注意を向ける。

2.1. in-, il-, im-, ir-

冒頭でふれた in-, im-, il-, ir- を英和辞書で調べると、興味深い点が浮かび上がる。『ジーニアス英和大辞典』の im- の項には [b, m, p, r の前で] という説明があり、in⁻¹を参照せよとの指示がある。il-, ir- も同様で、それぞれ in⁻¹と in⁻²を参照せよとの指示と共に、[l の前で]、[r の前で] と記されている。その in⁻¹と in⁻²には [p, b, m の前では im; l の前では il; r の前では ir- となる] と記述されているのみで、詳しい説明がないために要領を得ない。

OED によれば、im-, il-, ir- はすべて in- を源とする。さらに *OED* は、in- は初期のラテン語ではすべての子音の前で保持されたが、後期になると後続する子音に同化され、l の前では il- に、両唇音 (m, b, p) の前では im- に、r の前では ir- になるという説明と共に il-*late*, im-*bue*, im-*mit*, im-*pel*, ir-*radicate* を例示している (s. v. *in-*, pref.²)。つまり、in- は後続する音に同化されているのである。

ここで同化の仕組みを説明しよう。同化は単語内あるいは隣接する単語間の音が隣接する音の影響で変化する現象を指し、進行同化、逆行同化、融合同化の三つのパターンに分類される。進行同化では、先行する音が後続する音を変化させる。例えば、bacon の c の軟口蓋音 /k/ が後続する /n/ に影響を与え、同じ軟口蓋音の /ŋ/ にする。逆行同化では、of course の of が course の /k/ によって無声化されて /ɔf/ となるように、先行する音が後続する音の影響を受けて変化する。融合同化では、want you の /t/ と /j/ が相互に影響を与え合って /tʃ/ となる。上述した il-, im-, ir- はいずれも逆行同化に当たる。例えば、下記の immortal を例にとると、ラテン語では元来 *in*-mortal であったが、in- に後続する m の影響で先行する n が m に同化して im となり、それが英語に借用された。

in- : incessant, indirect, inequality, infant, insane, involuntary

il-: illegal, illicit, illiterate, illogical

im-: imbecile, immature, immemorial, immortal, impartial, impatient, impossible

ir-: irrational, irregular, irrelevant, irrespectful, irresponsible

上記の例のうち、派生と意味の関係が明瞭ではないと思われる例について説明を付す。語源については、以後、*OED* に依拠する。incessant は、cease 「止まる」と同じ語源の cessant が in- と結合して「絶え間ない」という意味をもつようになった。infant は in + fant 「話す」から形成され、「話すことができない」から転じて「幼児」となった。このように、英語史と音声学の知見を応用すれば、接頭辞が異形を持つ実態が明らかとなる。次に、com- の異形が生じた過程を探ってみたい。

2.2. com-, col-, cor-, con-

ラテン語起源の接頭辞 com- は両唇音の b, p, m の前ではこの形を保ったが, m は r と l が後続するときは同化された。(OED, s. v. com-, pref.)。後に, com- は他の子音の前で con- となった。com- が子音の前で con- に変化した現象は, 発音のしやすさと関連している。

com-: combat, combine, comfort, command, comment, compact, companion,
compassion, compile, complain, compromise

col-: collaborate, collapse, collect, collide, collocate

cor-: correct, correlate, correspond, corrupt

con-: concentrate, confirm, confront, conquer, conscience, construct

派生語の音声変化は英語に借用される前に生じたため, in- を含む派生語と違って com- を含む派生語はそれと認識するのが困難であったり, 注意しなければ派生関係を見落としてしまうような例が多い。例えば, panis 「パン」を語幹に持つ companion は「一緒にパンを食べる人」に由来する。company 「一緒にいること, 会社」も同じ語源である。また, labour という語幹から成る collaborate は「共に努力する」から「協力する」という意味になった。combat は battere 「戦う」を語幹とし, compile は pile 「略奪する, 盗用する」から派生した。編纂を盗用と捉えていたことが出発点となっている。collide と correct はそれぞれ「殴打で怪我をする」と「まっすぐに導く」を意味する語幹に接頭辞を加えて, 「衝突する」, 「正す」の意味に発展した。

なかには注意深く観察すれば語幹が一つの語として明確な姿を現す例もある。collapse 「崩壊する」の語幹 lapse 「落ちる」は単独でもラテン語から英語に借用され「ある状態に陥る, 誤り」の意味を持つ。correspond 「一致する」は respond 「約束に応じる」から, concentrate は centrare (centre と同語源) から, また construct は structure と語源を同じくする struere 「重ねる, 建てる」から形成された。compassion の語幹 passion は, 現代英語では「情熱」が一般的な意味であるが, 元来は「苦しみに耐える」であり, 「一緒に苦しみに耐える」から「共感」が生じた。一方, passion の語源的意味は「キリストの受難」に生き残っている。conscience の語幹 science は「科学」ではなく語源的意味を保持している。OED によれば, scire (知っている) を語源とする science を含む conscience は英語に借用された後, ものごとの「正誤を判断する感覚」から「良心」の意味を生み出した (s. v. conscience, 4.)。このように, 派生関係を理解するには派生語の歴史的発展と意味の拡張を射程に入れることが重要である。

2.3. ob-

ラテン語起源の接頭辞 ob- は、「～の前に」、「～に向かって」、「～の方向に」等の意味を持ち、c の前で oc-, f の前で of-, p の前で op-, m の前では o- に同化された (OED, s. v. ob-, pref.)。いずれも逆行同化である。以下に若干の例を示す。

ob-: object, oblige, observe, obstruct
 oc-: occupy, occur
 op-: opponent, oppose, opposite, oppress
 o-: omit

object の ject は「投げる」を源とし、object は「前に投げられたもの」から「反対」の意味となり、更には「目で知覚できるもの」から「対象」に、「努力が向けられるもの」から「目的」に派生した。「反対する」という意の動詞はその後生じた (OED, s. v. object, n. & v.) また、ject は inject 「中に投げる→注射する」、project 「前に投げる→予想する、企画する」、reject 「投げ返す→拒否する」の語幹にも使われている。

occur は英語に借用される以前のラテン語の段階で ob- が語幹の c に同化して oc- に変化したものである。語幹の cur は currere (走る) に遡り、「～に向けて走る」から「現れる、起こる」の意味が生じた。course や current も同じ語源から派生している。前者は「走る道や方向」、「競技場のコース」の意味に派生し、後者は「走る」から「潮流」や「時代の流れ、風潮」などを生み出した。「通貨」や「普及」の意味をもつ currency の底流にも「走る」が存在する。

ob- は p で始まる語が後続するときは op- に変化した。oppose の op- も pose (「置く」が原義) による同化である。「逆らって置く」から「反対する」となった。opposite や opposition も語源を同じくする派生語である。語幹の pose は他の接頭辞とも結びつき、派生語として英語に取り入れられた。分離を表す dis- と結合した dispose は「離して置く」から「配置する」や「処理する」などの意味を生み出した。expose 「外に置く」は「晒す」や「暴く」へと、compose 「一緒に置く」は「組み立てる」や「創作する」へと意味拡張した。construct でも触れたが、struct (<struere) は ob- と結合すると「逆らって重ねる、建てる」から「妨害する」となった。oppress は「逆らって押しつける」から「抑圧する」となった。語幹の press は他のさまざまな接頭辞と結合し、depress 「下に押し付ける→意気消沈させる」、express 「外に押し付ける→表現する」、impress 「中に押しつける→印象づける」、suppress 「下に押しつける→鎮圧する」等の派生語として輸入された。

2.4. sub-

ラテン語起源の sub- は s, t, v で始まる語の前では変化しなかったが, m と r の前では同化されることが多く (summon, surrogate), c, f, g, p の前では決まって同化が生じた (*OED*, s. v. *sub-*, *pref.*)。

sub-: subdue, subject, submit, subscribe, subsequent

suc-: succeed, succinct, succumb

suf-: suffer, suffice, suffix, suffocate

sug-: suggest

sum-: summon

sup-: supply, support, suppress

sus-: suspect, suspend, sustain

sub- は「下に, 下から」, 「近くに」, 「代わりに」などの意味を持つ。subdue 「下に導く→制圧する」, subject 「下に投げられた→支配を受ける」, subscribe 「下に書く→署名する」, subsequent 「下に (近くに) 続く→その後の」, substitute 「下に (代わり) に設置する→取り替える」など多くの語を形成している。sub- は既に英語に取り入れられている語と結びついて新たな派生語を形成することもある。例えば, 17世紀にラテン語から借用された conscious は19世紀に subconscious として姿を現し, 14世紀にフランス語から入った marine は sub- と結合して「海中に存在する」や「海中で操作される」という形容詞を経て, 名詞としても使用されるようになった。「潜水艇」の意味が生じたのは19世紀末である (*OED*, s. v. *submarine*.)。同じように, 19世紀に造られた subway (地下道) は, アメリカ英語では20世紀初頭に「地下鉄」の意味を持つようになった (*OED*, s. v. *subway*.)。

sub- 以外の異形は後続する子音に同化されている。suffix 「下位 (補助的) に固定する」は, 接尾辞として語の品詞を決定する機能を有している。succeed (suc + ceed 行く) は「近くに行く」から「上手く行く」となり, 「後を継ぐ, 相続する」の意味にもつながる。現代英語では「成功する」と「相続する」の間には意味の関連が見えにくい, 根は同じである。succumb は「下に横たわる」から「屈する」になったが, この意味の派生の根底には, 強者が「上」で弱者が「下」という意識があると考えられ, 先に扱った subject 「下に投げられた→支配を受ける」にも当てはまる。この上下の力関係は「下に押しつける」を原義とする suppress にも見られる。力で押しつけることが「鎮圧する」につながる。

現代英語で「苦しむ」や「被る」などの意味を持つ suffer は「下から運ぶ」という原義に遡る (*OED*, s. v. *sub-*, *pref.* 25.)。下から運べば当然のことながら苦しい思

いをする。同じ「下から運ぶ」の意味を持つ語幹が別の意味を生み出すこともある。suggestの語幹も「運ぶ」だが、「下から運ぶ」から「示唆する」、「提案する」となった。同じように、supportの語幹portは「運ぶ」という意味だが、「下から運ぶ(支える)」ことによって「支持する」となった。人を表す-erを付加すれば、ホテルで荷物を運ぶporterやサッカーファンなどのsupporterとなる。「下から支える」と同じように「下でもつ」sustainは「維持する、支える」となった。

sub-とspecere「見る」が結合したsuspectは、「下から見る」という原義から「怪しむ」や「疑う」となった。語幹specereはspectator「観客」やspectacle「壮観」のように接尾辞と連結するだけでなく、接頭辞とも結合してexpect「外を見る→期待する」、inspect「中を見る→点検する」、prospect「前を見る→展望」、respect「振り返って見る→尊敬する」などに幅広く用いられている。suspendはラテン語の語幹pendere「ぶら下がる」に遡る。「下にぶら下がる」という語源的意味は、宙に浮いた状態から意味の拡張を通して「中断する」となった。16世紀に-erを伴って形成されたsuspender「吊るすもの」がズボンに使用する「サスペンダー」の意味を帯びたのは19世紀初頭である(OED, s.v. suspender, 4.)。pendereは14世紀にフランス語から借用されたpendantにも使われている。「ぶら下がっている」から「ペンダント」が生じた。現在分詞-antは英語の-ingに相当する。depend(頼る)も接頭辞de-(下に)と連結して「下にぶら下がる」から「頼る」となった。dependentにin-を伴ったindependentは16世紀にフランス語を経由して英語に入った。この語は、pendにin-とde-の二つの接頭辞と接尾辞-ent(フランス語の現在分詞)の三つの接辞から構成された派生語である。

上に示したように、本節では、cor-, op-, suc-などの接頭辞の異形がすべて同化によって派生した仕組みと共に、派生に伴う豊かな語形成の過程を明らかにした。

3. 終りに

上述したように、接頭辞はさまざまな語幹と結びついて英語の語彙を豊富にする役割を果たしてきた。同時に、ラテン語から借用された語の中には、英語に導入される以前の段階で同化という音声変化を経っていたため、一つの接頭辞が複数の異形をもつ例が生じた。拙論では、派生語の音声変化の仕組みを明らかにすると共に、接頭辞と語幹の柔軟な結合が多く語を生み出した過程を例示しながら、派生が造語形成に果たした貢献度を、その一端ではあるが示した。英語史と音声学の知見を生かして派生の仕組みを深く理解すれば、英語学習者による語の理解と習得の幅は、派生語が増殖するごとく、より一層広がると思われる。

参考文献

- Barber, Charles. *The English Language: A Historical Introduction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).
- . *Early Modern English* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1976; rpt. 1997).
- Baugh, Albert C. *A History of the English Language*, 5th ed. (London: Routledge, 2002).
- Brook, G. L. *Words in Everyday Life* (London: The Macmillan Press, 1981; rpt. 1983).
- Crystal, David. *Spell it Out: The Singular Story of English Spelling* (London, Profile Books, 2013).
- Hoad, T. F, ed., *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford: Oxford University Press, 1986).
- Jespersen, Otto. *Growth and Structure of the English Language*, 9th ed. (Oxford: Basil Blackwell, 1962).
- Nevalainen, Terttu. “Lexis and Semantics,” in *The Cambridge History of the English Language*, Vol. 3, 1476–1776, ed. Roger Lass (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), pp. 332–458.
- . *An Introduction to Early Modern English* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006).
- Onions, C. T, ed., *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford: Oxford University Press, 1966; rpt. 1994).
- Roach, Peter. *English Phonetics and Phonology*, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 1991).
- Sheard, J. A. *The Words We Use* (The Language Library) (London: Andre Deutsch, 1954).
- Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds., *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989).
- Upward, Christopher & George Davidson. *The History of English Spelling* (Wiley-Blackwell, 2011).